平和への思いを伝えよう！

～次代に戦争体験を伝える取り組み

戦争を終えて、来年で70年を迎えようとしています。

老人クラブでは、単位クラブや老連の活動を通じて子どもたちに戦争体験を語り、「平和の大切さ」や「命の尊さ」を伝える取り組みを行ってきました。現在では学校のプログラムの中に、高齢者と生徒たちの交流が計画され、授業の中で体験を伝える機会も増えています。一方、戦争体験者の高齢化にともない、新たな取り組みも始まっています。地域や学校で、戦中戦後の体験を伝えてほしいという声も高まっています。

本誌では、空襲体験の発表会を開催した広島県福山市老連、会員に呼びかけて体験記をまとめた茨城県水戸市高連、そして26年間「平和のかたりべ事業」を実施している東京都墨田区老連の取り組みを紹介します。

初めて開催した「空襲の体験を語り継ぐ会」

広島県福山市老人クラブ連合会

●当時の資料からよみがえる記憶

福山市は昭和20年8月8日、アメリカ軍による空襲で354人が死亡、市街地の8割を焼失しました。こうした体験を語り、若い世代に平和の大切さを伝えようと、昨年、市老連は「福山空襲の体験を語り継ぐ会」の開催を企画しました。事業は若手委員長が中心となり、所属する南学区老連で開催することになりました。

初めに取り組んだのは、若い世代に体験者の話を理解してもらうための資料づくりでした。福山市内のことだけでなく、当時の日常生活などについて紹介しました。打合せを始めた当初は、記憶があいまいになっている人も多く、「忘れてしまった」と話す役員もいました。しかし、空襲前日に米軍がまいた市民に避難を呼びかけるビラのコピー、市内に建立されている慰霊の「母子三人像」の絵本などの資料を提供したところ、記憶がよみがえってきたのでしょうか、多くの人が語り始めました。

そして、集まりを何回か重ねるうちに、参加者には「次代に語り継がなくてはいけない」という思いが強くなり、4人が語り部を引き受けてくれました。あまりに悲惨な体験でしたので、これまで周囲の人に語ることがなかった人たちでした。

予想外に多くの市民が集まった「空襲の体験を語り継ぐ会」

●語り合いの中から自分の役割を実感

市老連の取り組みが事前に新聞に掲載されたことで、会場には予想を超える約150人の市民が集まりました。あいにく若い世代は高校生が数えるほどでしたが、同世代の方が大勢来ていました。

語り部の4人が語り終えたところで、会場の参加者に「体験を語ってくれる人はいませんか」と尋ねたところ、現在も地元にある南小学校の教師をしていたという女性をはじめ、複数の人が自らの体験を語りました。終了後のアンケートには、ほとんどの方から「また開催してほしい」「二度と戦争を起こしてはならない」と書かれていました。

今年度の取り組みは検討中ですが、昨年の取り組みをみて、福山市より「空襲体験を語ってほしい」という依頼がきています。

（会長　吉岡敬時）

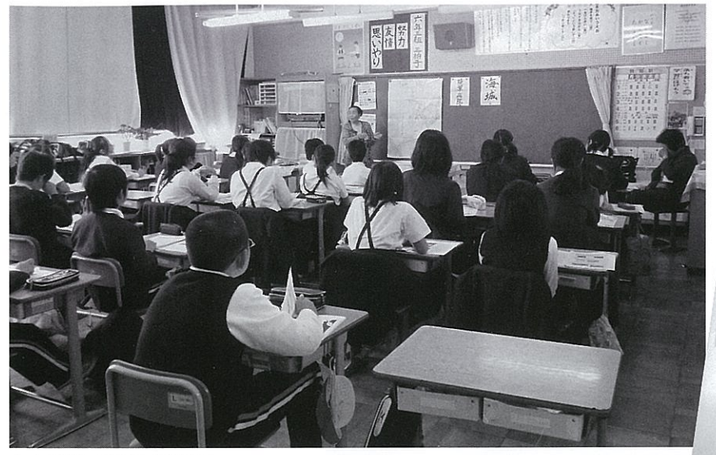
高齢者の役割「戦争体験・記憶の記録づくり」

茨城県水戸市高齢者クラブ連合会

●一丸となって取り組む記念事業

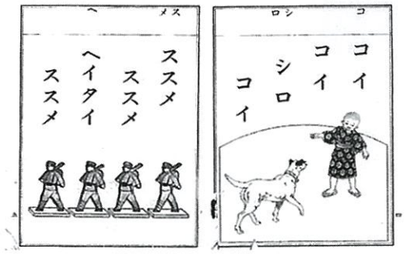
水戸市高齢者クラブ連合会は、昨年50周年を迎えました。その記念事業として取り組んだのが、「水戸大空襲を中心とする戦争体験・記憶の記録づくり」です。市高連は、「平和に暮らすことの大切さを次の世代に伝えていくことは、高齢者だからできる大切な役割」と会員に呼びかけ、役員、単位クラブ会長、女性部員が原稿の募集に一丸となって取り組みました。こうして寄せられた原稿は95点、最高齢は97歳の男性です。どの原稿も2000字の文字の中に、次の世代に伝えたい思いがあふれていました。

原稿の整理、文字の入力、校正、時には本人から聞き取って原稿を書いたり、本づくりはすべて自分たちで行いました。担当したのは「記念誌編集部会」、70代を中心とした市高連役員8名です。



小中学校で戦争体験を語る

記念誌



会員から提供された資料
（1年生が使った『小学国語読本』）

印象的だったのは、会員が持っている当時の貴重な資料の数々です。高齢者は歴史の宝箱だと感じました。

●子どもたちが理解しやすい本づくり

集まった原稿は、内容ごとに水戸の空襲、戦地体験、国内での戦争体験、抑留・引揚げ体験、戦時下の学校生活、市民生活に分けて掲載しました。子どもたちが理解しやすいように、難しい漢字にはふりがなをふり、用語解説は128項目に及びました。この他、年表や旧日本軍の階級表、戦争切手の紹介を加えました。

体験記は200ページに及び、市高連50周年記念誌の第2部「語り継ぐ戦争体験記」として紹介しています。記念誌は3部構成で、第1部は連合会のあゆみ、第3部は水戸市も大きな被害を受けた東日本大震災の体験記や記録を掲載しました。

平成25年12月にできあがった記念誌は1万5千部作成、このうち1300部を市内の学校をはじめ市民センターや市立図書館などに寄贈しました。特に小中学校には、授業や行事で副読本として活用してもらえるように、複数冊を配布しました。地元新聞社が紹介してくれたり、市立博物館からは掲載者に語り部になってもらいたいとの依頼もきています。

（会長名　清水昭郎）

DVDで残す「戦争体験証言集」

東京都墨田区老人クラブ連合会

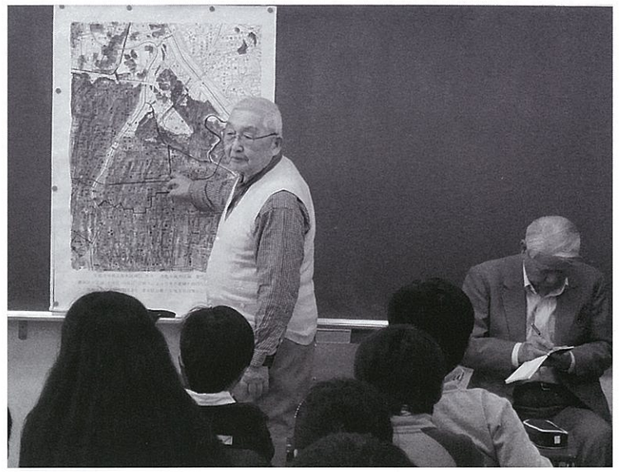
●26年続く、平和のかたりべ事業

墨田区は、大正12年9月1日の関東大震災、昭和20年3月10日の東京大空襲と、災害と戦争によって二度にわたり大きな被害を経験しました。平成元年、区の「平和福祉都市づくり宣言」の趣旨を生かした取り組みとして、区老連で「次代に継ぐ平和のかたりべ事業」を始めました。

活動は区内六つの地区ごとに取り組んでいます。事業が始まった頃は、子供会や町内会も参加して、昔遊びや〝すいとん〟の試食なども行っていましたが、現在は小学校の事業の中で、かたりべを中心にしたプログラムを行っています。年度始めに小学校の校長会で区老連より事業の説明を行い、申し込みのあった小学校と地区の老人クラブが打ち合わせて実施しています。昨年は10校、約1900名の児童との交流が行われました。

平和への思いを伝えよう！
～次代に戦争体験を伝える取り組み

DVD を製作



地図などでわかりやすく説明

紙芝居形式で戦争体験を伝える

●アニメを使って事前学習

長い取り組みの中で、子どもたちの様子もずいぶん変わってきました。かたりべの方々も子どもたちにわかりやすいように、焼失した地域を赤色で塗りつぶした地図を作成するなど、さまざまな工夫をしてきました。

近年では、東京大空襲や戦争に関して、子どもたちの好きなアニメを使って事前に学習してから、かたりべの話を聞くプログラムにしています。アニメの教材を使うことにより、子どもたちの集中力と関心を高め、かたりべの話を理解しやすいように補っています。当時と現在の暮らしが大きく異なる中で、こうした工夫や、事前の学校担当者との打ち合わせを丁寧に行うことが大切だと考えています。

●映像で証言を記録する

区老連は、戦争体験者が高齢になる中、その証言を映像で残していこうと、5年前からDVDの収録を始めました。収録時間は1人15分、DVD1枚に2人ずつ収録し、これまでに5枚、10人の記録を残しました。昨年収録した方は7歳の時に体験した大空襲を鮮明な記憶で語りました。子どもたちとの交流では伝えられなかった悲惨な現実も語られており、区老連では若い世代にぜひ見てもらいたいと考えています。DVDは希望者に貸し出しを行い、活用を広めています。

この他、3年前には観光協会からの声かけに応えて、平和学習の「かたりべ」として3人が登録、墨田区を訪れる観光客から希望があった場合に話をしています。こうした実績を重ねた区老連は、墨田区の平和を語り継ぐ取り組みの中で、なくてはならない存在になっています。

（会長名　沼田典之）